

平成21年 5月25日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19710220  
 研究課題名（和文） マスキュリニティ・クライシスを経験した韓国男性の男性性に関する研究  
 研究課題名（英文） About masculinity of Korean men that experienced masculinity crisis

研究代表者  
 佐々木 正徳（SASAKI MASANORI）  
 九州大学・大学院人間環境学研究院・助教  
 研究者番号：40403977

研究成果の概要：マスキュリニティ・クライシスを経験し乗り越えた男性は、多様な乗り越え方を示したが、共通して「男性」としての役割（＝男らしさ）に固執していた。これは、行動規範に「男性」という属性が関与していることを意味している。つまり、「男性だから」という理由である行動をとるということである。クライシスを経験した男性は、男性役割の獲得により意識的であった。韓国の社会的規範としての男性役割の強固さと、男性役割のヘゲモニーの強さを明らかにすることができたことが本研究の最大の意義である。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1800000	0	1800000
2008年度	1000000	300000	1300000
年度			
年度			
年度			
総計	2800000	300000	3100000

研究分野：韓国のジェンダー、男性性

科研費の分科・細目：特定新領域・ジェンダー

キーワード：ジェンダー、男性性、マスキュリニティ、ヘゲモニー、ミリタリズム、韓国

## 1. 研究開始当初の背景

ジェンダー研究における男性性研究（すなわち過去の男性中心的な研究を批判的に捉えた上で行う男性に関する研究）は、現在二つの大きな特徴がある。一つは「男性を『ジェンダー化した存在』と捉え、彼らを社会的・文化的に構築された『男性性』（masculinities）との関係で捉えようとする」特徴であり、

もう一つは、「男女間の差異を権力や支配の問題と結び付けて捉えようとする」特徴である（多賀太「男性学のゆくえ」保坂恵美子編著『比較ジェンダー論』ミネルヴァ書房、2005年）。男性性とグローバリゼーションの研究は、特に前者の特徴の中で発展してきた研究である。

コンネルは男性性の構築性に注目し、世界

各地の男性性の事例を収集・分析し、比較検証することが、男性性研究の領域には必要であると指摘している (Connell, Robert W., *The Men and The Boys*, University of California Press, 2000)。しかし同時に、これまでの研究の多くが欧米圏の研究者による欧米圏を対象とした研究にとどまっていたということも指摘している (Connell, Robert W., 前掲書)。つまり、アジア地域は日本、韓国、中国といった、「フェミニズムのインパクト」を経験し、かつ経済成長にともなって社会がグローバル化している地域が複数存在するのにも関わらず、男性性研究の事例が圧倒的に不足しているのである。中でも特に、韓国の男性性に関する研究はないに等しい (Taga, Futoshi, "East Asian Masculinities," in M. Kimmel, J. Hearn and R. W. Connell (eds.), *Handbook of Studies on Men and Masculinities*, Sage Publications, 2004)。こうした限界から脱却するために、近年男性性研究の文脈では欧米外の地域の男性性を積極的に調査・分析する研究が現れてきており、徐々にではあるが、現地の研究者による事例研究も発表されつつある。申請者の研究は男性性研究のこうした流れの中に位置づけられる。

## 2. 研究の目的

本研究は男性性研究の領域に韓国の男性性の事例を追加することで、男性性研究の大きな潮流の一つである男性性とグローバリゼーションの研究に貢献し、男性性の普遍性・可変性・特殊性に関するより精緻な議論の展開に寄与することを期待して行うものである。

筆者はこれまで、上記「1.」の背景に基づいて、「韓国の男性性の構造と動態について」をテーマとして研究活動を行ってきた。本研究は、その一環であり、端的に言えば、個人が有する男性性と社会的にヘゲモニーを有する男性性との間の関係について検討するものである。

これまでの研究を通して、親フェミニズム

的な男性運動への参加者は、いわゆる保守的・家父長的な男性性・男性役割に疑義を抱いていながらも、それとは異なる形の「理想の父親 (男性) 像」の構築を希求しており必ずしも性別役割規範から自由ではないということや、セクシュアルマイノリティの存在に対して必ずしも肯定的な態度を示すわけではないということを示してきた。そこで、次なる課題は、運動に参加していない大多数の男性たちの日常生活のミクロな部分に現れる男性性、つまり、個人が有する男性性と社会的にヘゲモニーを有する男性性との間の関係について検討することである。

## 3. 研究の方法

過去あるいは現在に何らかの形で男性性に起因するアイデンティティ・クライシス (以後、マスキュリティ・クライシスと定義する) を経験した (している) 男性をインフォーマントとして、クライシスに直面したきっかけや、そこから抜け出した方法について聞き取り調査を行う。具体的には、徴兵制度の中で周縁的な立場として位置づけられる「公益勤務」を経験することにより、軍隊の中の「男性文化」に直接的に触れることができずにマスキュリティ・クライシスを経験した男性と、配偶者あるいはパートナーがフェミニストで相手に影響を受けてマスキュリティ・クライシスを経験した男性を対象として調査を実施した。マスキュリティ・クライシスに直面した時、自らの有する男性性と自身のおかれた環境との折り合いをどうつけたのか、日常生活の中で「男性性」と向き合った経験のある男性を対象にすることで、韓国社会でヘゲモニーを有している男性性と、それらが韓国男性に与えている影響について明らかにした。

また、本研究は仮説生成的研究であるため、調査と分析を交互 (あるいは同時進行的) に行っていく必要がある。よって、インタビュー調査→分析・仮説生成→より深化したインタビュー調査→より精緻な分析・仮説の洗練→インタビュー調査→さらに詳細な分析・仮説の検証、という具合にスパイラル式に調査・分析を進めていった。本研究については、三回の訪韓を行い、全部で 15 名の質的データを収集することに成功した。

## 4. 研究成果

(1) 2007年度の調査において明らかになったことは、マスキュリティ・クライシスを経験し乗り越えた男性の乗り越え方は多様であったことである。例えば、ヘゲモニックな男性性の三要素である「権力志向」「所有指向」「優越指向」を維持する形で乗り越えた

男性、既存の男性役割とは異なる役割を自身の男性性とする事で乗り越えた男性などである。しかし、一方で「男性」としての役割（＝男らしさ）に固執しているという点では共通点が見られた。つまり、自身がある行動を選択するときその行動を選択する基準が「男性であること」という自らの性によっているということである。2008年度への研究の発展方向として、この「男性としての役割への固執」について、より深くインフォーマントに迫っていくことの必要性が導き出されることとなった。また、その中で、女性運動の活動家を妻に持つ男性よりは、軍隊との関係でマスキュリティ・クライシスを経験しているインフォーマントに焦点を当てることにより研究目的を達成する上で有効であると考えられるようになった。そのため、2008年度の調査では徴兵制と関連してマスキュリティ・クライシスを経験したインフォーマントに注目することとした。

(2) (1) で述べたように、2008年度は「男性としての役割への固執」をキー概念として、新規インフォーマントへの面接調査およびデータ分析を行った。

その結果、男性としての役割への固執は、やはり多くのインフォーマントに繰り返し現れた。それは同時に、行動規範に「男性」という属性が関与するという仮説をより強く裏付けるものであった。つまり、ある行動を選択する際に判断基準となるものが、自身の性、つまり「男性だから」という理由である行動をとるということである。こうした意識は一般の男性にもみられるものであろうが、マスキュリティ・クライシスを経験した男性には、より強く男性役割の獲得がみられることとなった。

(3) 2008年度は特に新規インフォーマントとして兵役免除者を確保することができた。兵役免除者は、徴兵制が自然化している韓国社会にあって、もっとも周縁に位置づけられる男性である。それゆえ、マスキュリティ・クライシスもより強烈なものとなることが予想された。

そして、調査の結果、彼が現在もマスキュリティ・クライシスの最中にあることが明らかになった。彼は、形に現れる明確な差別は経験してきてはいないが、職を転々とせざるをえない状況に置かれていたり、現役出身の友人たちとの間に精神的な距離を感じたりするなど、現実的にも精神的にも、現代韓国社会において周縁に位置づけられており、中

心との距離はなかなか縮まらない状態である。兵役免除は本人の希望ではなく、検査によって決定されるものである。それにも関わらず、免除となった者は「男らしさ」の世界から除外されることになり、中心へと向かう針路を切り開けない状況なのである。「男性」としての地位を強固なものとしていない彼は、むしろ自らが男性であることへの執着を強く有することになってしまったのである。

(4) 以上まとめてきたように、二年間の研究における最大の意義は、韓国の社会的規範としての男性役割の強固さと、男性役割のヘゲモニーの強さを明らかにすることができたことである。最後に、調査結果から得られた知見から、男性性とヘゲモニーの関係について述べることにする。

マスキュリティ・クライシスは男性性のヘゲモニーがより強固な地域において強く生じる。そして、マスキュリティ・クライシスは、男性を「男性役割」へと引きつけ、これが当該社会のヘゲモニーと結びつくことで、当該社会のヘゲモニーをより強固なものへと形成させていくことになる。韓国社会はまさにその典型であるといえる。

すなわち、徴兵制という男性を社会化させる国家的な仕組みが成立している中で、自らの意志ではない形で、その周縁に位置づけられる男性たちは、徴兵制を経験することによって付与される社会的なヘゲモニーを獲得できないがために、それに対する憧憬を強め、ヘゲモニーを強固にしてしまうということである。

以上のように、本研究では、これまで明らかにされてこなかった、韓国のへげもニックな男性性について、その周縁的な存在に注目することによって、社会とヘゲモニーとの関係について明らかにしたものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 佐々木正徳、「韓国の労働格差とジェンダー文化の視点から」、『日本ジェンダー研究』、12巻、印刷中、2009年、査読有り

[学会発表] (計1件)

- ① 佐々木正徳、「韓国の労働市場と文化・ジェンダー」、日本ジェンダー学会、2008年9月15日、大阪女学院大学

[図書] (計1件)

- ① 片山隆裕編、『アジアから観る、考える一

『文化人類学入門』、2008年、ナカニシヤ出版、33-47頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木正徳 (SASAKI MASASNORI)  
九州大学・人間環境学研究院・助教  
研究者番号：40403977

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：